

発達障害児を養育する保護者のストレスと自己成長感

—ソーシャルサポートとの関連—

瀧 水城¹ 中村 真理²

本研究では、発達障害児を養育する保護者のストレスと自己成長感、そしてソーシャルサポートがストレスと自己成長感にどのように関連しているのかを明らかにすることを目的とした。関東地区で発達障害児・者を養育している保護者71名を対象に質問紙を配布し、40名から回答を得た。分析の結果、ストレス因子の中では不安感得点が高く、自己成長感因子の中では障害理解得点が高かった。ソーシャルサポートとの関連では、負担感因子と学校側のサポートとの間に弱い相関が見られ、学校側と保護者側の考え方にズレがあり、それが保護者のストレスになっている可能性が示唆された。また、精神的強さ因子と障害理解因子は親の会との間に中程度の相関が見られ、同じ悩みをもつ親との関わりは自分一人ではないという孤独からの脱却を促し、精神的強さや障害理解という自己成長感を促進させると考えられた。

キーワード：発達障害、保護者、ストレス、自己成長感、ソーシャルサポート

問題と目的

発達障害は、見えにくい障害と言われている。それは障害に気づきにくく、異常が発見されても診断の確定が難しいといった側面をもつためである。その見えにくさが、母親をストレスフルな状況に追いやっていくという報告がある（中田, 2002）。

家族は、障害のある本人にとってもっとも身近な存在であり、また本人の人生の中でもっとも長く寄り添う社会的集団である。本人を含めた家族全体を支援対象とすることは教育的にも医療的にも福祉的にも大きな意義を持っている（井上, 2007）。また、障害乳幼児を養育している保護者を支援するには、担当者は保護者の考え方やおかれている状況を理解して対応することが重要であると小林（2008）は指摘している。

これまで家族や保護者を対象とした研究の重要性が説かれており、中でもストレスや負担感など一般的には否定的な感情と考えられる側面を扱うものが多かった。

障害児を養育している保護者に関するストレスの研究として、稲浪、小椋、Rodgers、西（1994）は、55項目11尺度からなる Questionnaire on Resource and Stress (QRS) 簡易型を作成し、障害児を育てる親のストレスを測定した。そして障害のない子どもの親と比較し、11尺度のすべてにおいて障害のない子どもの親に比べて、障害のある子どもの親のストレスがより高いとの結果を得ている。

呉・岡田・朴・金・中嶋（2009）は、障害児の特性

と母親の育児負担感に関する調査を行った。その結果、子どもの特性のうち問題行動のみが育児負担感に影響し、問題行動の中で、「感情統制困難」因子と「人間関係の維持困難」因子が母親の育児負担感に影響していた。

広汎性発達障害児をもつ親や家族に焦点をあてた研究として、宋、伊藤、渡邊（2004）は、高機能自閉症・アスペルガー障害の子どもをもつ親に焦点をあて、抱えているストレスを明らかにし、ストレスとサポートの関連を検討した。ストレスに関して因子分析を行った結果、負担感、不安感、期待感の3因子が抽出された。また吉田、宗方、都築（2009）は、発達障害の子どもをもつ母親の眼に見えない苦悩に焦点をあて、発達障害への支援を障害に応じて考えていくために、LD、ADHD、広汎性発達障害を持つ母親のストレス構造を検討した。因子分析の結果、不安感、負担感、発達可能性への期待感、社会支援への期待感の4因子が抽出された。

しかし近年の研究では、ストレスや負担感など一般的には否定的な感情と考えられる側面のみではなく、障害児を養育することによる肯定的な側面に目を向けようとする研究も現れ始めている。

奇（1999）は、障害児を持つ親が実際に育児体験による自己の成長をどのように捉えているのかを、乳児から成人に至る障害児（者）の母親に「育児を通して自分が成長したと思うところ」についての自由記述による調査を行った。そしてその結果を分類し、子どもの接し方、障害への視点変化、対人面の成長、自分への気づき、感受性の豊かさ、精神的強さ、行動の積極性、人生観の深まり、心のゆとり、人への思いやりの10のカテゴリーを得ている。また、障害児の母親が

1 国立病院機構宇都宮病院

2 東京成徳大学

育児過程の中で体験する気持ちについて、子どもの加齢・成長とともに肯定的感情が深まると報告している。

しかし、障害児を養育する親・家族に関する研究の中で、親の「自己成長感」について検討した研究は少なく、今後さらなる検討が必要な状況にある。

そこで本研究では、発達障害児を養育する保護者の負担感などの否定的な感情だけではなく、育児を通しての自己の成長をどのように捉えているかという点を明らかにすることを目的とした。また、ソーシャルサポートが保護者のストレスと自己成長感にどのような関連があるのかについても明らかにしていきたいと考えた。

そのため本研究では、質問紙による調査を行い、発達障害児を養育している保護者のストレスと自己成長感を明らかにした。また、どのような領域からのサポートを利用しているのか、さらにそれらのサポートとストレス及び自己成長感との関連について検討した。

方 法

- 1) 対象者 関東地区で発達障害児・者を養育している保護者71名に質問紙を配布し、40名(男性3名, 女性37名)から回答を得た。
- 2) 調査手続き 関東地区の児童通園施設, 病院, 作業所で質問紙の配布を行った。回収は直接行ったものと、場所によっては返信用封筒を同封し個別に返送してもらった。調査時期は2011年8～9月、質問紙への記入は児童通園施設、各保護者の家で実施された。
- 3) 質問紙
 - (1) ストレス尺度 (宋ら, 2004)

ストレスの測定には、宋ら (2004) が、本山 (2002) のストレス尺度の表現を一部変えたものを使用し、「あてはまる」「少しあてはまる」「あまりあてはまらない」「全くあてはまらない」の4件法で回答を求めた。なお、本山 (2002) のストレス尺度の表現を一部変えたものは、宋ら (2004) によって十分な信頼性・妥当性が確認されている。
 - (2) ソーシャルサポート尺度 (宋ら, 2004)

ソーシャルサポートの測定には、宋ら (2004) が作成したものを使用し、「よくあった」「たまにあった」「あまりなかった」「全くなかった」「該当なし」の5件法で回答を求めた。また、宋ら (2004) では、心理的サポートと実際的サポートの2つに分けられていたが、心理的サポートを実際のサポートの中を含める形で本研究は実施した。
 - (3) 自己成長感尺度 (橋本ら, 2010)

自己成長感の測定には、橋本ら (2010) に

よって作成されたものを使用し、「あてはまる」「少しあてはまる」「あまりあてはまらない」「全くあてはまらない」の4件法で回答を求めた。なおこの尺度は橋本ら (2010) によって構成概念妥当性 (検証的因子分析)、基準関連妥当性 (親の発達尺度の6項目との相関、セルフアンカリングスケールとの相関)、内的一貫性 (Cronbach の α 係数)、テスト・再テスト信頼性が確認されている。

結 果

保護者のストレス

ストレス因子ごとの得点を Figure 1 に示した。その結果、不安感得点が高い傾向 ($F(2,117)=3.083, p<.1$) が示された。

また、子どもの年齢を幼児期と学齢期以降の2群に分け、親のストレス度について検討した (Figure 2)。その結果、期待感に関してのみ子年齢低群と子年齢高群の間に有意差 ($t(38)=3.14, p<.01$) が認められた。すなわち、子どもの年齢が低い群の方が高い群よりも有意に親の期待感が高いことが示された。

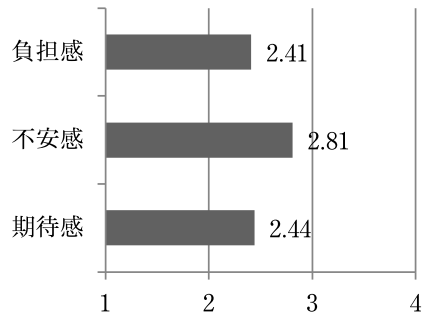


Figure 1 ストレス因子ごとの得点

保護者の自己成長感

自己成長感因子ごとの得点を Figure 3 に示した。その結果、障害理解得点が高い ($F(2,117)=22.567, p<.01$) ことが示された。

サポート利用率

ソーシャルサポートをどの程度の保護者が利用しているのか明らかにするために、30のサポート源に関して利用率を求めた (Figure 4)。その結果、配偶者と自分の兄弟・親戚が1番高く示され、続いて自分の両親、同じ悩みを持つ親が高かった。また、家庭教師や塾の先生、適応教室が1番低く、続いて学童保育の指導員、大学等の研究機関のサポート利用率が低かった。

ストレスとサポートの相関

ストレス3因子とサポート (30のサポート源を内容

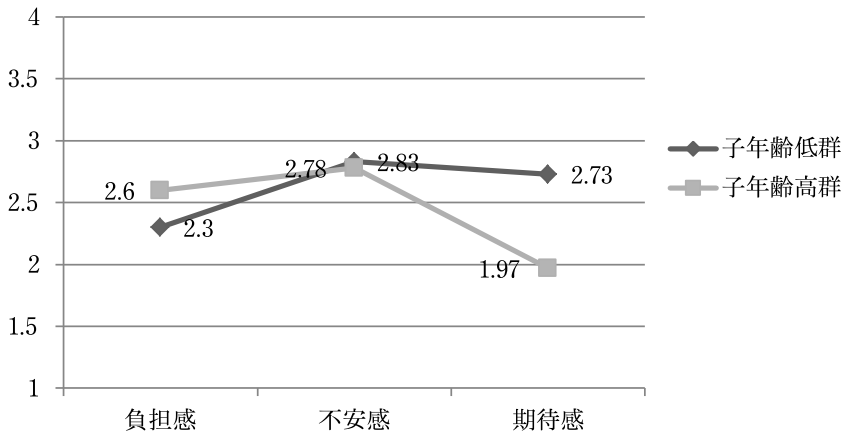


Figure 2 子どもの年齢群別の親のストレス

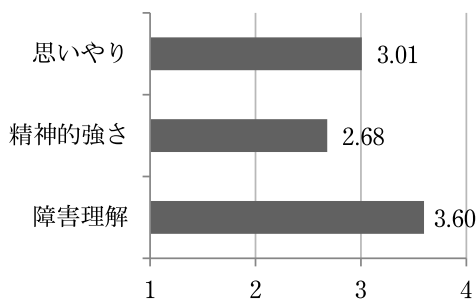


Figure 3 自己成長感因子ごとの得点

別に家族、近所・知り合い、配偶者、学校、医療、専門機関、親の会、地域機関の8つに分けた)との相関を調べるためにピアソンの相関係数を求めた (Table 1)。その結果、負担感と学校の間で5%水準で有意な相関 ($r=.373$) が見られた。

自己成長感とサポートの相関

自己成長感3因子と8つに分けたサポートグループとの相関を調べるためにピアソンの相関係数を求めた (Table 2)。その結果、精神的強さと親の会 ($r=.408$)、障害理解と親の会 ($r=.411$) の間に1%水準で有意な相関が見られた。また、障害理解と家族 ($r=.392$)、障害理解と近所 ($r=.382$)、障害理解と医療 ($r=.328$)、そして思いやりと配偶者 ($r=-.331$) の間に5%水準で有意な相関が見られた。

考 察

ストレス

ストレス因子の中では宋ら (2004) と同様に不安感が1番高いという結果となった。矢部ら (2010) は、診断前の時期、就学前、進学前などの節目節目にネガティブな感情が高くなる傾向があり、子育ての中で不安を抱え続けるということが示されたとしている。このことより、発達障害児を養育している保護者のストレスにおいて不安感というものが1番感じられやすく、どの年代においても強く感じるストレスであるということが考えられる。

また、子どもの年齢が低い群の親の期待感は、年齢が高い群よりも有意に高かった。期待感について中塚 (1984) によれば、負担感、不安感がネガティブなス

Table 1 ストレスとサポートの相関

	家族	近所	配偶者	学校	医療	専門機関	親の会	地域機関
負担感	-.009	.023	.124	.373*	.208	.224	.183	.160
不安感	-.153	-.157	.033	-.004	.159	.228	-.158	.019
期待感	.083	-.133	.097	-.259	-.267	-.022	-.208	-.250

* $p<.05$, ** $p<.01$

Table 2 自己成長感とサポートの相関

	家族	近所	配偶者	学校	医療	専門機関	親の会	地域機関
思いやり	.041	.088	-.331*	-.082	.186	.145	.210	-.008
精神的強さ	.192	.226	-.017	.046	.101	.024	.408**	.192
障害理解	.391*	.382*	.095	.190	.328*	.133	.411**	-.026

* $p<.05$, ** $p<.01$

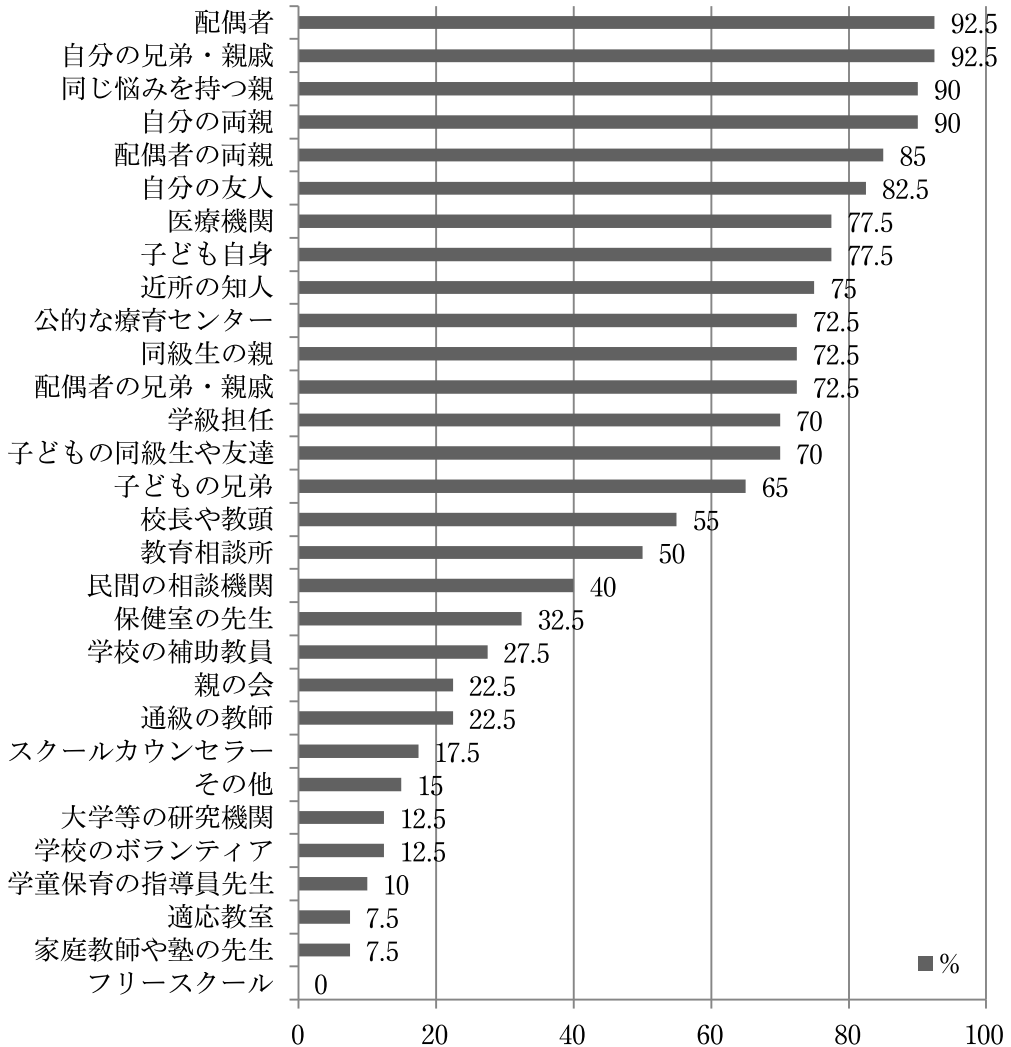


Figure 4 サポートの利用率

トレスであるのに対し、期待感はいずれも子どもの障害を克服しようとする態度であり、どちらかと言えばポジティブな、望ましいストレスであるとされている。しかし、宋ら（2004）は過度に高い期待感はいずれも子どもの実態とずれている可能性もあり、この場合はネガティブな影響を及ぼしかねないとしている。このことより本研究における結果は、子どもの年齢が低い群の親は子どもの実態とズレのある期待感をもっている可能性が考えられ、子どもの年齢が高くなっていくにつれてそのズレが小さくなっていく、すなわち期待感が低くなっているのではないかと考えられた。

自己成長感

自己成長感因子の中では障害理解が1番高いという結果となった。このことより、発達障害児を養育して

きた中で自身の子どもや同じ障害をもった子どもや他の障害について考えるようになってきたなどの障害理解が深まっていることが示唆された。

また、精神的強さが1番低く示されたが、精神的強さというのは発達障害児を養育していく中で感じるものが少なく、かつあまり変化しないものである可能性が考えられる。しかし、本研究では子どもが幼稚園あるいは保育園に通っている保護者が約50%ほどであったため、まだ精神的強さを感じるものが少なかったり、これから子どもが成長するにつれて強くなっていったりする可能性も否定できない。

サポート

サポート利用率において、配偶者や自分の兄弟・親戚が高かった。このような家族内におけるサポート、

特に夫婦間の緊密な関係や協力が親の適応に良好な影響を与えるという研究がある。

内野 (2006) は自閉症などの発達障害児をもつ父母に対して、外部からのサポートと夫婦間のサポートの養育ストレスとの関連を検討し、父親の知覚したソーシャルサポートが高いほど、父親から母親への夫婦間サポートが高く、父親から母親へのサポートが低いほど母親の養育に関する不満が多く見られたことを示した。

また Shapley, Bitsika, & Efremidis (1997) は、自閉症児の親は他の家族成員が子どもの障害を肯定的に受け止め、養育上のサポートを提供していた場合に不安や抑うつ症状が有意に低いことを明らかにした。

一方、竹田ら (1999) は、夫のサポートは、母親の不安を和らげ、母親の子どもへの関わり方や子どもの発達にも良い影響を及ぼすとしている。

以上の先行研究より、本研究における配偶者からのサポートに関する結果を見ると、本研究の保護者は不安などが低い可能性も考えられる。

ストレスとサポート

ストレスとサポートの相関分析の結果から、負担感と学校の間には5%水準で有意な相関が見られた。新美ら (1984) や金子 (1992) の研究から、学校からの援助や助言が、学校側の意図するとおりに保護者に受け止められない場合、学校自体がストレス源になり得ることが示されている。

このことより、本研究においても学校側と保護者側に考え方のズレがあり、学校のグループに分類されたサポート源によって発達障害児を養育している保護者は負担感を感じているという可能性が考えられる。

自己成長感とサポート

自己成長感とサポートの相関分析の結果から、精神的強さと親の会、障害理解と親の会の間には1%水準で有意な相関が見られた。また、障害理解と家族、障害理解と近所、障害理解と医療の間にも5%水準で有意な相関が見られた。目良ら (1998) は、意識・価値観の変化に及ぼす要因として、周囲の人々の理解、同じような境遇の親たちとの出会い、自分一人ではないのだという孤独からの脱却などを挙げている。このことより、親の会や同じ悩みを持つ親との関わりによって自分一人ではないのだという孤独からの脱却を感じることで精神的強さや障害理解が促進され、保護者自身が変化を感じることが多くなっていくのではないかと考えられる。また、発達障害児を養育している保護者の障害理解を促進させていく要因として、家族や親の会や同じ悩みを持つ親、近所の人、医療とのつながりが考えられる。

また、思いやりと配偶者の間にも5%水準で有意な

相関が見られた。竹田ら (1999) は、夫のサポートは、母親の不安を和らげ、母親の子どもへの関わり方や子どもの発達にも良い影響を及ぼすとしている。このことより、他人の気持ちを考えるようになったり自分を客観的に捉えられるようになったり、広い心をもてるようになるなどの思いやりは、配偶者との関係によって感じるようになっていくということが考えられる。

ストレスと自己成長感

ストレスと自己成長感との間には有意な相関は見られなかった。しかし、不安感と精神的強さ、期待感と障害理解の間には弱い負の相関が見られた。このことより、不安感を感じている状況では精神的強さを感じることはあまりなく、現実から遊離した期待感を持ち続けることによって障害理解は進みにくいという可能性が考えられる。

今後の課題

本研究では、保護者の自己申告に基づいた診断名に従った。そのため、保護者の捉え方により実際の診断名と多少違いがある可能性があるかもしれない。今後は、診断に関係するより多くの情報を得ることによって、子どもの実態をより正確に把握したうえで調査を行う必要がある。

本研究では子どもの年齢差も大きく、学齢期の子どもを養育している保護者のデータが少なかった。またデータの総数も少なく、分析を行う上でデータ数が不十分であるという事が考えられた。そのため、より多くのデータを集め分析を行うことで発達障害児を養育している保護者についての理解が深まると考える。また、相関研究は、因果関係を特定する上では限界があり、縦断研究や多くの面接調査等を併せて実施することによって確かめることも必要である。

今回は分析の対象としなかったが、質問紙の自由記述欄には子育てを通しての思いや周囲に対しての思いなど多くの記述があった。自由記述について分析をすることによって発達障害児を養育している保護者の思いについての理解がより深まる可能性があるだろう。

また、本研究は発達障害児を養育している保護者のみを対象に行った研究である。今後、定型発達児を養育している保護者との比較をすることで発達障害児を養育している保護者特有の特徴が明らかになるだろう。

引用文献

- 呉裁喜・岡田節子・朴志先・金貞淑・中嶋和夫 (2009). 障害児の特性と母親の育児負担感の関係 大東文化大学紀要, 社会科学, 47, 285-294.
- 橋本真規・奥住秀之・熊井正之 (2010). 障害児を育てる母親の「自己成長感」尺度の作成と信頼性・妥当

- 性の検証 発達障害研究 ,32,458-467.
- 稲浪正充・小椋たみ子・Catherine Rodgers・西信高 (1994). 障害児を育てる親のストレスについて 特殊教育学研究 ,32,11-21.
- 金子健 (1992). 学齢期における家族サポートー学童保育所での障害児の受け入れー 発達障害研究 ,14,98-104.
- 奇恵英 (1999). 障害児を持つ親から学ぶ 教育と医学 ,47,19-25.
- 小林倫代 (2008). 障害乳幼児を養育している保護者を理解するための視点 国立特別支援教育総合研究研究紀要 ,35,75-88.
- 目良秋子・柏木恵子 (1998). 障害児をもつ親の人格発達ー価値観の再構築とその要因ー 発達研究 ,13,45-51.
- 中田洋二郎 (2002). 子どもの障害をどう受容するかー家族支援と援助者の役割ー 大月書店.
- 中塚善次郎 (1984). 障害児をもつ母親のストレス構造 和歌山大学教育学部紀要教育学科学 ,33,27-40.
- 新美明夫・植村勝彦 (1984). 学齢期心身障害児をもつ父母のストレスーストレスの構造ー 特殊教育学研究 ,22,1-11.
- Shapley,C.,Bitsika,V., & Efremidis,B. (1997). Influence of Gender, Parental Health, and Perceived Experience of Assistance upon Stress Anxiety, and Depression among Parents of Children with Autism. *Journal of Intellectual and Developmental Disability*,22,19-28.
- 宋慧珍・伊藤良子・渡邊裕子 (2004). 高機能自閉症・アスペルガー障害の子どもたちと家族への支援に関する研究ー親のストレスとサポートの関係を中心にー 自閉症スペクトラム研究 ,3,11-22.
- 竹田小百合・岩立京子 (1999). ソーシャル・サポートが育児ストレスにおよぼす効果についてー特定のサポート源の違いおよびサポートに対する必要度との関連からー東京学芸大学紀要 ,50,215-222.
- 柘植雅義・井上雅彦 (2007). 発達障害の子を育てる家族への支援 金子書房.
- 内野里美 (2006). 障がいのある子どもの両親に対するソーシャル・サポートー夫婦間サポートと養育ストレスに及ぼす影響ー 家族心理学研究 ,56,233-237.
- 矢部満衣子・都築繁幸 (2010). 高機能広汎性発達障害児の母親の感情体験に関する検討 障害者教育・福祉学研究 ,6,35-45.
- 吉田優英・宗方比佐子・都築繁幸 (2009). 軽度発達障害児の母親のストレス因子に関する研究 障害児教育・福祉学研究 ,5,85-93.
- ー2014.1.19受稿,2014.3.13受理ー

Stress and Personal Growth of the Parents Who Bring up Developmentally Disabled Children: Relation to Social Support

Mizuki Taki (*National Hospital Organization Utsunomiya Hospital*)
 Mari Nakamura (*Tokyo Seitoku University*)

The purpose of this study was to examine stress and personal growth of the parents who brought up developmentally disabled children, and what kind of social support related to stress and personal growth. The participants, 40 parents, completed questionnaires including the 3 scales: stress, personal growth and support. As a result of the analysis, feelings of anxiety were the highest in the stress scale and understanding of disability was the highest in the personal growth scale. Also, a weak correlation was found between stress and special support in school. Moreover, a medium correlation was found between the parents' association of the developmental disability and personal growth.

Key words : developmental disabilities, parents, stress, personal growth, social support

Bulletin of Clinical Psychology, Tokyo Seitoku University
 2014, Vol. 14, pp. 1-6